

ソ ヴ ィ エ ト に お け る 英 語 学

—スミルニツキーの“古代英語”—

岡 部 匠 一

Old English Language —the Study in CCCP—

Shōichi OKABE

(昭和34年12月9日受理)

本稿は、Смирницкий⁽¹⁾ の古代英語の紹介であり、何ら、独創性を要求したり、問題を提起するものではない。—Anglicist として、英語、英文学に紹介、あるいは、導入されることの少ない、Soviet における、英語学研究への、naive な assimilation の試みである。

翻案的な訳出を試みたのは、‘古代英語研究への常識’とも言うべき、最初の4章と、最終章におかれている Синтаксис である。

Syntax は、OE においては、外国の文献においても、比較的僅かしか、研究の名に値するものは出されていない現状に鑑み、特に、訳出を、試みた。Terminology は、試案であり、西欧の英語学におけるそれとは、かなり、内包や、術語体系全般にわたって、ずれがあるように思われる。

本書の成立、その他については、訳出した序言と、序論について窺えると思うので省き、本書は、ВИБЛИОТЕКА ФИЛОЛОГА に、含まれていることを、附言しておきたい。

序 文

この本は、А. И. Смирницкий 教授の原稿に基いて書かれ、彼によって、生前に、考えられていた目的と、計画に一致している。

この本は、А. И. Смирницкий によって、英語史の課程の第一部として、考えられた。それ故、古代英語の部分とは別に、この本は、又、例えば、《英語と、そのゲルマン語族における位置》、《英語史の時代区分と、各時代の特徴概説》などのような、この課程に関係ある章を、含んでいる。

又、一方では、古代英語の体系の共時的な記述のみならず、又、この体系の起原が、又次の二つの主要な場合における、他のゲルマン諸語からの事実が、本書に与えられている限りでは、広く考察されている。

- 1) ゲルマン諸語が、英語の文献記録以前の歴史を明らかにしている時、
- 2) 他の古代ゲルマン諸語の、言語体系と比較して、古代英語の体系の共時的な特性

脚註 (1) ПРОФ. А. И. СМІРНИЦКИЙ, ДРЕВНЕАНГЛИЙСКИЙ ЯЗЫК 317pp.
(МОСКВА 1955).

を、特に注意する必要がある時。

この本の上梓に際しては、著者の、次の研究業績の草稿が、利用された。

1. 古代英語の音韻
2. ゲルマン諸語
3. 古代ゲルマン語の文献
4. 古代ゲルマン語の韻律
5. 古代ゲルマン語のアクセント
6. 古代ゲルマン語の語イ
7. 分析的型態

1. の研究、《古代英語の音韻》は、全部本書に組み入れられ、A. И. Смирницкий の後期の印刷された研究と照合して、ごく僅かに、補われた。他の5部の研究は、それが、古代英語の問題を解明し、必要な比較資料を含んでいる程度に依拠してのみ、利用された。この他、本書の記述のためには、モスクワ国立大学で、長い年月の間、A. И. Смирницкий によってなされた講義の草稿が、利用された。

本書の上梓と、印刷に際しては、上述の研究や、講義案において述べられた、A. И. Смирницкий の思想を、できるだけ正確に、伝えることが、考えられた。従って、少量の資料で、記述された章（特に、Ситаксис の章）は、A. И. Смирницкий によって、他の研究や、講義案や、個人的談話で、与えられた、意見や、または、直接的な示唆を利用する可能性がないときには、加筆補足されなかった。

В. В. Пассек

序 論

この本で、著者は、古代英語の体系（その語イ構造、文法組織、及び、音韻構造）の、体系の記述と、その体系の起原についての、簡略な概観を与えることを、目的として、設定した。この本は、古代語グループ（クラス）や、学位志願者や、英語学の領域における、教師や、専攻者を対象としたものである。が、又、この本は、ゲルマン語の、他の諸言語の研究に、たずさわっている人々によっても、利用されることができる。

本書は、その根本とするところは、古代英語の体系の、通時的な、記述である。各章の終りに与えられている、語源の補説は、補足的な役割を、はたすものであり、そして、古代英語の体系の特性の、より完全な、より全面的な、解明を目的としている。それと共に、共時的な概観と、語源は、明瞭に、規定されており、また、大ていの場合には、章ごとに、分けて、与えられている。

§ 2. これに関して、当然に、通時、共時と、名づけられている、方法論の間の、関連についての問題が、起る。

言語の研究において、通時と、共時を（すなわち、通時言語学と、共時言語学）を、厳密に、区別する必要性を固執している、F. Saussure と、彼の後継者を、彼等の学派が、

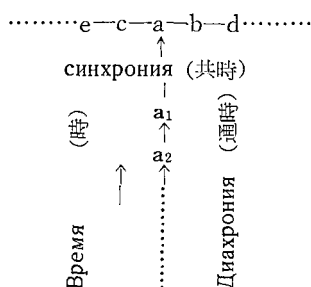
* 実際は、301～306 pp. にまとめて与えられている：itan-beran 等の、強勢がおかれている母音の対応の説明を求める等、基礎的なものが多いのは、本書の性質から考えて肯ける、

言語の共時的な研究を、その通時的な研究からの分裂せしめた点において、非難するのは、正しい。しかし、しばしば、そのような分裂を、さけようとして、必然的に、彼等非難する人々は、通時と、共時を分けていない。が、まさに、《分裂》⁽¹⁾と、厳密な《区別》⁽²⁾は、全然、同一のものではない。

現代の、ブルジョワ的な西欧の構造主義言語学をも含めて、根本的な誤謬は、次の点にある。すなわち、通時的な事象は、単一の事象の領域として、考察されているが、一方、体系としての言語は、ただ、共時の層においてしか、研究されていない、という点にある。別の言い方をすれば、言語の発達とは、個々の現象の変化としてしか、述べられていない、体系としての変化としては、述べられていない。しかるに一方、体系は、ただ、一定の時点においての、その所与においてしか、研究されていない。すなわち、言語の、ある《切断面》⁽³⁾か、あるいは、《横断面》⁽⁴⁾としてしか、研究されていない。なぜならば、言語の発達の代りに、一つの体系の、他の体系への変化が、考えられている。この点において、真の、共時の通時からの分離と、ソスエールのな、構造主義の反歴史主義が存する。

各々の具体的な言語現象は、一方では、歴史的継承によって、一定の先行する現象と、結びつけられている。その諸現象は、与えられた、現象の発達の、あれ、これの段階を示す。そして、これと共に、又、一方では、一定の関係によって、同時に、それらと、存在している諸現象と結ばれている。それゆえ、ロシア語の単語 **волк** (狼) は、歴史的な発展段階の線に沿って、その発展段階のより古い形 **вълк** < *włkъ < *w'lk'os……と結ばれている。そして同時に、又、ロシア語の発達のその与えられた段階においては、この語は、語形成の面においては、**волчица** (牝狼)、**волчий** (狼の) 等の、色々な単語と結ばれている。文法の面においては、屈折変化の、これこれのタイプの名詞と結ばれている。しかし又、物的な意味の面* では、**медведь** (熊)、**лиса** (狐) や、その他の語と、結ばれている。

一般的な見地からすれば、具体的な単語 **a** の、共時と、通時の相関関係は、次のように表現されうる。



この表から、通時と共時の区別は、さけることができないのは、明らかである。したがって、二つの関連を区別し、又、研究することが、かくべからざることである。その時、その科学研究の過程において、通時、あるいは共時の面の分与が、一定の場合においては、十分に目的になかった、全く、正しいものであることが示されうる。しかし、このこ

(1) отрыв (2) различие (3) сечение (4) поперечный разрез

* предметно-семантической линии

とは、研究の両面の実際の分離に立ち到ってはならない。その理由は、次に述べられる。

1) 言語の任意の単位の変化は、孤立的な単位の変化としてではなく、又、孤立的な要素の変化としてでもなく、体系の諸部分の変化として生ずる。それゆえ、共時の面、すなわち、同時に存在する体系の面は、言語の変化の研究に際して、すなわち、通時の研究に際して、顧慮せざるをえない。

2) 一定の時期の言語——それは、時間において、現在あり、発達しつつある。すなわち、自らのうちに、共時の契機を含んでいる言語である。言語の横断面⁽¹⁾を作ることは、原則としては、一定の時期にわたっては、存在しない。なぜならば、時間の要素が、その本質に則して、言語の中に入ってくるからである。

言語の任意の単位は、時間における、その連続的な、法則的な発展の条件に際してのみしか、存在しない。型態素、語、句⁽²⁾は、始めと、終りをもっている。すなわち、時間において、要素が、一定の動きをみせている。(стол であって、 o_T^C ! ではない)。かくして、言語の共時的な体系は、必然的に、時に関して、研究されなければならない。この際、幾つかの現象は、発達しつつあるものとして、表われる。又、他の現象は、死滅しつつあるものとして、あるいは、化石化しつつあるものとして表われる。又、第三の種類の現象は、比較的平衡なものとして、表われる。

かくして、新しい現象の言語における発達や、古い現象の死滅、あるいは、保持は、体系のあれ、これの単位の、まさに、その性格において、反映されている。任意の一定の時点における、これらの単位は、変化に対する関係においては、新しい単位か、古くなってゆく単位か、または、古くなってしまった単位か、あるいは中性的で、どちらでもない単位かのいずれかである。が、しかもなほ、これらすべての単位は、時間における、言語の発達に関係している言語単位の性格をもっているのである。すなわち、その言語の通時的な面に対して関連している、言語単位の性格をもっている。かくのごとくして、共時的な面における言語の研究は、本質において、歴史的にならなければならない。すなわち、言語に含まれている、通時の契機を学ぶことが、欠くべからざることである——時間における、長さ、と、発展を、考慮することが、必要である。しかし、このことは、相応する現象と、その相互関係の記述は、その起源の記述にまで、高められなければならない、一つの構図において、現存のものと同じく、過去のものをも、与えなければならない、というようなことを言っている。真実の歴史⁽³⁾主義は、次のものの、厳密な区別を要求する。すなわち、起ったものと、存在していたものとの厳密な区別、新しいものと、その代りにこの新しいものが発達してきた所の以前のものの性質の厳密な区別を、要求している。存在したもの、すでに生ききったものは、これらのものが、歴史的に形成され、発達しつづけている、という見地に立てば、新しくなったもの、新しく、なりつつあるものへの考察に、混同しては、ならない。

§ 3. 本書が、古代英語の体系の起源についての、簡単な知識を与えることを目的と

(1) поперечный разрез языка (2) морфема. слово. фразеологическая единица

(3) подлинный историзм

して設定していることに、関連して、特別の考察を必要とする、他の重要な問題は、それらの資料を、受けとることに関する問題——すなわち、比較歴史的方法に関する問題⁽¹⁾と、いかなる段階において、この方法の助けによって、言語の体系の、文献的記録にない歴史を解明することができるか、に関する問題である。

まず、第一に、次のことに注意をむける必要がある。すなわち、比較歴史的方法⁽²⁾—言語研究の特殊な、専門的方法としての、比較歴史的方法は、言語、あるいは、諸言語の、比較歴史的な研究法から、区別する必要がある、ということである。

あれ、これの言語の比較歴史的な研究は、正に、その名称が示すように、他の言語と比較した、その歴史的発展における、与えられた言語の研究である。言語、あるいは、諸言語の比較歴史的な研究は、広範囲の、多様な課題を設定している。与えられた言語の起源の解明、その言語と、他の諸言語との間の、歴史的関連の性格の規定 (or 決定)。特に、いわゆる、その親族的な連聯の性格の規定。与えられている、その言語における、平行的な発展の諸原因の研究。研究されている言語に対する、他の諸言語の影響の条件と、経路の解明等である。従って、比較歴史的研究法は、より一般的な課題の解決には、いかなる、部分的な、具体的な結果をうることが、必要であるか、ということに依存しつつ、種々の、特殊な方法を、利用する。

かくして、言語の間の平行的な発達の原因と、分離の原因を解明するためには、まず第一に、一致と相違の事実そのものを確定し、又、相互に対立する諸事実を、実際に比較対照して、それらを正しく記述することが、必要である。この比較歴史的方法は、比較記述的方法⁽³⁾、すなわち、よく言われている、対置方法⁽⁴⁾を利用しなければならない。個別的な部分の間の実際の関連を記述し、そして、本質的なものと、非本質的なものを、正しく、区別している、与えられた諸言語の体系間の、明白な構図をうるためには、与えられた言語の諸事実は、対応する、他の言語の諸事実と比較して、この方法の助けによって、科学的に記述される。

更に、文献の研究の基礎に、比較されている言語の歴史の研究が立てられているならば、これらの文献に含まれているものの音声と、また、しばしば、その意味をも規定することが、必要である。又、言語の文献というものは、本質的に、与えられた言語で書かれた、発話の、何等かの断片ではない、と言うことを常に想起する必要がある。なぜならば、それらの文献は、一定の作品の単なる外的側面の、多かれ、少なかれ、近似的な表現にすぎないのであるから。ここにおいて、その書写記録にそくして、発話を再構する、特別の方法をとることが要求される。なぜならば、古い発話を、直接に観察することは、できないし、又、書かれたものを、その真の音価で、比較することは、できないからである。そこで問題は、個々の文字の読みの規定、個々の語の意味の設定、又、書かれたものを、もっている、すべての結合 (総体) の完全な書き入れ (判読) であり、又、これらとの関連において、色々な方法を区別することができる。言語の歴史は、その言語が、属す

(1) вопрос о сравнительно-историческом методе

(2) сравнительно-исторический метод

(3) сравнительно-описательный метод

(4) сопоставительный метод

るところの国家の歴史と、密接な関連を、もっているのです。言語あるいは、諸言語の比較歴史的な研究は、その社会の歴史、特に、文化の歴史を含めることなくしては、すまされません。この文化史は、ある条件のもとにおいては、考古学や、民族学と関係がある。歴史や、考古学や、民族学は、それ自身の特別な、研究方法をもっている。そして、これらの方法を、言語学の諸問題の解決のため使うには、研究方法論の、特殊の補足的な手法⁽¹⁾を必要とする。

ここでは、言語の比較歴史的な研究の、必要かくべからざる方法論上の手法の複雑性を十分に示しているといえたりし、とえば、当らずと言えども、遠からず、であろう。

その言葉の本来の意義においての、比較歴史的方法は、この方法論的な手法の、もっとも重要な、構成部分の一つである。それでは、この比較歴史的方法は、いかなる役割を果たし、そして又、どのような、直接的、具体的結果が、この方法により達成せられるか？

比較歴史的方法は、言語の比較歴史的研究に対して、欠くべからざる特殊な手法の一つであるが、次のように定義することができよう。

言語学における、比較歴史的方法は、この術語の特殊な意味において、文献に則して、又は、生きている話し言葉の慣用によって、直接に知られている、互に資料的に対応する、後期の二つ、あるいは、いくつかの、具体的な言語の、計画的な比較によって⁽²⁾、過去の言語諸事実の一定していない文献（文字）の再構の科学である。

上述したのは、具体的な諸言語の事実の、再構についてであって、文献によっては、固定されていない、これらの言語の過去における、まさに、これらの言語の再構については、言われていないのは、偶然ではない。くり返し、強調されてきたことは、なんらかの言語を完全な体系として、再構すること、従って、過去に存在して、すぎ去ってはいるが、まだ、文書によって、しめくくりが、つけられてはいない、ある言語の歴史における、なんらかの段階を再構することは、不可能である、ということである。再構されうるのは、過去に存在し、すぎ去った、体系の個々の部分のみであり、多かれ、少なかれ、これら、個々の事実の、いくつかの総和であって、そのすべての、構成部分と、構造において、すでに消え去った、全体系ではない。従って、比較歴史的方法によっては、言語の歴史は、その、よく言われているように、その流れのすべての広さにまで、伸ばすことは、できず、個々の連続体によってのみ、それは、伸ばすことが、できるのである。

しかし、何が、再構されうるか、と言うことは、控え目に言うべきではない。たとえ、以前の言語の体系が、すべて、完全には、再構されず、その体系内に入ってきた、知られている諸事実のみが、再構されるとは言え、これらすべての事実、完全に、分割された現象としてではなく、いくつかの連関をもつ、体系の構成部分として、再構されるのであるから。極度に分割され、そして、又、不完全な状態でのみ再構されるものは、それ自体としての、語イ構造である。

とにかく、すべてのものが再構されるということは、対応する諸言語の、将来の歴史、あるいは、すでに書かれた歴史、あるいは、その諸言語の同時代の研究のために、特に、それらの言語の、音韻論的、及び、文法的構造と、語形成体系の研究のために、大きな意

(1) дополнительная разработка (2) путем планомерного сравнения

味をもっている。

第 一 章

英語、そのゲルマン語族における位置。

§ 4. 英語は、ゲルマン語族に属する。現存するゲルマン諸語は、歴史的に構成された、二つの下位語族に分れる。

1) スカンデナヴィア、すなわち、北部ゲルマン語族と、2) 西ゲルマン語族、に分れる。スカンデナヴィア語族は、それに対応する言葉で、話している人の数において、西ゲルマン語族よりも、著しく少ない。すべての、スカンデナヴィアの諸語で、だいたい、1,400万の人が話していた時に、西ゲルマンの諸語で話している人の数は、全体で、ほぼ、3億人であった。のみならず、西ゲルマン諸語よりも、概して、スカンデナヴィア諸語は、互に密接な関係にある、ということに、注意する必要がある。

次の諸語が、ゲルマン諸語の、スカンデナヴィア下位語族を形成している。アイスランド語、フェレエイ語、ノルウェイ語〔二つの文学における(書きことばの)標準語をもっている〕、スウェーデン語、デンマーク語、が、それである。

次の諸言語が、西ゲルマン下位語族を形成している。すなわち、英語、フリースランド語、ネーデルランド語(すなわち、オランダ語)、であり、又、フラマン語、アフリカ語、及び、ヘブライ語(新ヘブライ語)、すなわち、Yiddish を含んでいる。

§ 5. 英語と、フリースランド語は、古代においては、特に密接な関係にあり、それゆえ、この二つの言語は、しばしば、西ゲルマン語族の特別な語族—アングロ、フリースランド語族(げん密に言えば、下位語族)として、分離される。が、英語、および、フリースランド語の、歴史的な運命は、すでに、決められていた。そして、現代においては、英語及び、フリースランド語は、非常に、お互いに離れている。これ以外の語族の、全体を形成しているのは、ネーデルランド語、アフリカ・ネーデルランド語、フラマン語、であり、それらは、互に、極度に密接な関係をもっている。これら、三つの言語は、ドイツ語の低地ドイツ地方の方言と、多くの共通点をもっている。それは、ちょうど、新ヘブライ語(Yiddish)が、高地ドイツ語に近いのと、同じである。

§ 6. 英語は、大英帝国、及びアメリカ合衆国の大部分において、広く用いられている。

大英帝国の領土において、広く用いられている英語の基礎となる言語は、英国の英語である。英本国においては、住民の圧倒的多数が、英語で話している。ただ、北部、及び、西部においては、まだ、ケルトの諸語が、保存されている。(山地のスコットランドにおける、ゲール語、キムル語、あるいは、ウェールズにおける、ウェールズ語である。) アメリカ合衆国の領土と、英本国を別にすれば、現在、英語が用いられている、最も重要な地域には、次のものがある。アイルランド(単に、北部アイルランドばかりでなく、エールも入る。エールでは、ケルト語、すなわち、エール語で、住民の一部分が、話している。)、カナダ、南アフリカ連邦、オーストラリア、ニュージーランド、である。多かれ、

少なかれ、英語で、話しているかなり多くの人々は、いくつかの他の地域にも存在する、それらの地域では、住民の大部分は、他の言語を話している。（例えば、インドにおけるごとく）

アメリカ合衆国においては、英語は、個々の植民地を考慮に入れなければ、いたるところにおいて、使われている。孤立的な植民地では、アメリカインディアンや、最近の植民者が、自分の土地の言葉を使い続けている。

§ 7. 英語は、その普及した、種々の場所において、同質ではない。英本国においても、いくぶんか、非常に、多数で多様な、まだ古くからの地域的な諸方言が、保存されている。この小さな方言は、普通、次の方言に統一される。1) スコットランド方言 (Scots, Scottish, 同様に, Lowland Scotch—平地スコットランド語—これは、ケルト系の Highland Scotch—山地スコットランド語、から区別されるものである)。2) 北部方言 (北部英語) Tweed 河から Humber 河までの、北部英語。3) 西部方言。4) 中部方言、と 5) 東部方言。ミドランド方言を形成している、すなわち、Humber と、Thames の間に位置して、ミドランド方言を形成している、東部英語。6) 南部方言、Thames から、南部の地域。

スコットランド方言は、北部英語と多くの点で、近いけれども、本質的には、他の英語の諸方言とは、異なり、特別の位置をしめている。なぜならば、16世紀までは、スコットランド人は、土地の方言に基礎をおいた、独自の、標準文語⁽¹⁾ を用いたからである。そして、この方言は、文学においては、又、より遅い時代、に準ずるものであり、(例えば、Robert Burns 1759—1796 の詩において) スコットランドにおける、英語の支配の時代においても、すでに、用いられていたのである。かくして、スコットランド方言は、その時に、形成され始めていた、自立的な言語を表わしている。そしてこの言語は、その領土における、比較的、それに近い英語が一般公用語⁽²⁾ 及び、標準文語⁽³⁾ として普及した結果、方言の位置まで、引きおろされたのである。

英国における古い方言は、一般共通標準文語⁽⁴⁾ によって、ほとんど、洗練されたが、遅れている地方は、多くの部分において、種々の方言的色合をもっている。それゆえ、消失しつつある方言の断片は、ある程度まで、国語共通語⁽⁵⁾ の地方的な変種のうちに、反映されている。現在においては、北部、西部、南部の英語などについて語るときには、特に、方言ではなくて、標準文語⁽⁶⁾ の、地域的な変種を意味しているのである。国語公通語のこれらの変種にたいして、いわゆる、標準英語 (Standard English)⁽⁷⁾ が対立する。すなわち、英語の典型的なタイプとして、認められている、地方的な色彩をもたない、標準文語である、標準文語英語⁽⁸⁾ は、書かれた形において、最高の統一性に到達している。なぜなら、書き言葉の標準文語⁽⁹⁾ においては、一般に、用いられていない、語や、言い廻しの、発音や用法に、地域的な変種の特長性が、ほとんど、表われないのである。共通標準

(1) письменный литературный образец (2) обще-государственный язык
 (3) литературный образец (4) обще-национальный литературный образец
 (5) разговорного национального язык (6) литературный образец
 (7) стандартный английский (8) литературный английский образец
 (9) письменный литературный образец

文語⁽¹⁾は、その起源においては、種々の方言—すなわち、根本的には、東部、および、中部ミッドランド方言の、混合の所産である。

アイルランドにおける英語は、英本国の方言からは、著しく異なる、それ独自の方言をもっている。同様に、アイルランドにおける国語標準語⁽²⁾の、大部分は、一目瞭然とした、地方色を帯びている。又、同様に、カナダや、オーストラリア、ニュージーランドや、南アフリカ連邦における英語は、あまねく、種々の、性格的な特殊性をもっている。一般には、標準英語の、地域的な変種の特殊性をもっている。そのみならず、それらの地方の各々においては、地域的な特殊の生活条件によって決定される、種々の特殊の語法⁽³⁾がある。そして、これらの特殊性は、いくぶん、書き言葉の標準文語⁽⁴⁾に、表わされている。しかし、根本においては、英本国の種々の地域に対する、‘標準英語’は、英本国におけると同様の標準語である。

アメリカ合衆国における英語は、無数の変種をもっているが、その変種間の差異は、英本国における、古代の方言ほど、著しいものではない。そして、この変種は、3つの方言に分れる。1) ニューイングランド方言は、ニューヨークの北東の、小さな地域に普及して、ニューイングランドという名のもとに、統一されている州の領土と、ほぼ、一致している。2) 南部方言は、ペンシルヴァニアや、オハイオ州の南部に普及し、又、更に、西に向っては、ミシシッピ河の、幅の広い流域に沿って、ミズーリ州との、より南の合流点まで、広がっている。が、しかし、メキシコ国境の南西部には達していない。3) 中西部方言、あるいは、《標準米語》⁽⁵⁾は、アメリカ合衆国の、残りの地域に行われているが、東部においては、太平洋まで達し、南部英語から、ニューイングランド方言を、分断している。そして、その地域の中に、ニューヨークを含んでいる。個々の方言における、性格的な特性と並んで（主として、発音についてであるが）、アメリカの諸方言は、概して、英本国における英語から、全体として、それらを分離する、これらの方言にすべて共通な特性（特に、語イと、慣用語句⁽⁶⁾において）を持っている。そして、それらの特性の大多数は、合衆国の標準語⁽⁷⁾に、根をおろしている。そして、アメリカの諸方言は、一般に、この標準語と、比較的同種の全体を構成している。《アメリカ合衆国における、真の標準英語》⁽⁸⁾は、英本国や、その領土におけるものとは、異なったものである。かくして、アメリカ合衆国の標準英語と、英本国（その自治領と、植民地をも含めて）の標準英語は、英語の二つの重要な変種として、まさに、対立している。が、アメリカ英語と、イギリス英語は、全く同一の言語の変種である。

第 2 章

古 代 英 語

§ 8. 古代ゲルマン諸語は、三つの語族に分れる。1) 西ゲルマン語族 2) 北ゲル

(1) национарный литературный образец (2) разговорный литературный образец

(3) лексик (4) письменный литературный образец

(5) общеамериканский (General American) (6) идиоматик

(7) литературный образец (8) самый образец английского языка в США

マン語族,あるいは,スカンディナヴィア語族 3) 東ゲルマン語族

1. 西ゲルマン下位語族⁽¹⁾は,古代英語,フリースランド語,古代サクソン語と,古代ドイツ語を,その中に含んでいる.これらの言語を,我々は,7世紀(古代英語),および,8世紀(古代ドイツ語)からの文献によって,知られている.文献の範囲について言えば,古代英語は,古代ドイツ語に,一步ゆずる.古代サクソン語は,最も,知られていない.古代フリースランド語については,ただ,13世紀の文献によってのみ,知られている.すなわち,本質的には,古代フリースランドの時代の文献によってのみ,知られている.なぜならば,古代の文献は,大部分,古い写本から,転写したものであるから.

2. 北方,すなわち,スカンディナヴィア下位語族の言語は,9世紀までに,大陸や,スカンディナヴィア半島や,スカンディナヴィア半島と,直接に,隣接している島々に,広がっていた.スカンディナヴィア下位語族を話していた,もっとも南の種族は,デンマーク人(デイン人)の種族であった.スウェーデンの現代の南部の地域は,デイン人の故郷であった. skåne (スコーン)や, Bleckinge ^{ブレッキング} や, Hallands ^{ハルランド} の地方は,起原においては,デンマークの州である.さらに北部の Värnern, および, Vättern の湖水地方に,ガウト族⁽²⁾が,住んでいた.この種族は,東,および,西ガウト族に,分れていた.そして,現在,すべてのこの地方は, Götland と,呼ばれる.しかし,この地方の西部,および,東部地方は,それぞれ, Västerland, および, Oestergötland と,呼ばれている.ガウト人より北方には,スウェーデンの種族,より正確には,スペイン種族が,住んでいた.スペイン種族の言語は,ゴウト語と,密接な関係がある.そのみならず,ゴットランド島の住民が,しゃべっていた,古代において,存在した,グートニー語⁽³⁾を,分離するのが,望ましい.スウェーデン族から,北西の方には,‘北方の人’⁽⁴⁾,すなわち,ノルウェイ人の土地⁽⁵⁾があった.彼等には,種族の呼名はなかった.(昔は, Norðvegr ‘北方の路’⁽⁶⁾と呼ばれていた.すなわち,民族上ではなく,地理上の名称を,もっていた).かくして,古代のスカンディナヴィア半島には,四つの言語があった.西スカンディナヴィア語—ノルウェイ語—と,東スカンディナヴィア語—デンマーク語と, Götä⁽⁷⁾語をもつ,スウェーデン語があった.そして又,最後には,スウェーデン語と融合した,グートニー語があった.

4世紀の末には,ノルウェイの政治的統合と,スカンディナヴィア半島からの,大量のノルウェイ人の移民により条件づけられる,アイスランド島の植民が始まった.この移民の結果として,新しい言語,すなわち,古代アイスランド語が形成された.さらに,これより以前に, Faroe 島⁽⁸⁾の移民が始まり, Faroes (ファローズ語⁽⁹⁾)が,最後に,形成された.

3. 東部の英語は,死語によって,表わされている.文献において保存されている,唯一の言語は,ゴート語であり,ゴート族の僧侶 Wulfila (Ulfila)⁽¹⁰⁾によってなされた,

(1) подгруппа (2) племя гаутов (the *Geatas*.) cf. A. J. Wyatt, *Beowulf* (Cambridge, 1914, 1952), pp. 164. (3) гутнийский язык (4) северные люди (5) северные путь

(6) ‘Land of the North men’ (L. H. Gray, *Foundation of Language*, New York, 1939, pp. 345.) (7) гаутский—Götä? (8) Фарерские острова (9) ферейский язык

(10) Gray, op. cit., pp. 345. : Вульфिला

福音書の翻訳である。この語族の他の二つの言語、ブルグンド語と、ヴェンダル語は、永久に、消え失せて、ただ、僅かの量の個有名詞を、残している。ゴート語のテキストは、4世紀に属する。しかし、我々には、これらのテキスト⁽¹⁾は、6世紀の写本⁽²⁾で、残されている。この写本の量は、大したものではない。そのうえ、写本は、単一の形態である。が、にも拘らず、ゴート語の意義は、大きい。なぜならば、ゴート語は、古い時代の文献で、表わされているからであり、この文献は、それらの言語で書かれた、古い文献によって、裏づけられていない、他のゲルマン諸語の、より古い状態について、判断することを許すからである。

§ 9. 英語は、紀元後、7世紀から始まった文献で、知られている。英語の歴史は、三つの主要な時期に分れる。1) 古代英語：11世紀の終りまで、2) 中世英語：11世紀の終りから、15世紀まで（あるいは、15世紀の最後の四半世紀まで）、3) 近代英語：15世紀末から、現代までの、言語の歴史における、一般的、漸進的な、発達においては、より急速な、あるいは、より緩慢な、発達の時期が、見られる。この時期が、言語の歴史を、時代に区分するための基礎である。英語のより急速な発達の時期は、11世紀と、15世紀である。この二つの時期は、各時期の間の、推移の境界として、その時代を分ける可能性を与える。この11世紀と、15世紀においては、先行する世紀と、より一致していることが、明らかになっている。その結果、各時期の間の境界は、11、および、15世紀の、最後の、4半世紀に、引くことが、最も正しいと思われる。そのみならず、言語の歴史の研究においては、言語の歴史の各時期を境界ずけている、具体的な日付をあげることが（文献の完全な分類などにおいては）、便利なことがある。英語に対しては、このような日付として、1066年（ノルマン王の征服）と、1476年（英国における印刷術の導入）が、ふつう、提起されている。この日付は、11、および、14世紀の最後の4半分に一致し、又、同時に英語の存在条件の変化を、記念している日付でもある。しかし、この日付の制約を強調するには、1075、および、1475年を立てて、端数を切りすてることが、目的に、かなっているように思われる。

古代英語の時期の始まりについては、紀元後、5世紀に、帰すべきである。なぜならば、この世紀に、それから、現代英語の骨格が、できた、古代ゲルマンの諸方言が、英本国に、アングロ・サクソンの種族により、もたらされ、英国の地方の大部分を占めたからである。このことは、一方では、恒常的な、古代ゲルマン諸方言からの、英語の比較的な孤立性を規定し、又、一方では、一言語の一すなわち—古代英語の諸方言の間の関連に、変っていった、英国にもたらされた、ゲルマン諸方言の間の、変ることない緊密な関連を、規定している。かくして、古代英語の時期は、《文学記録以前の時期》⁽³⁾、すなわち、この言語で書かれた写本が、我々に残されていない時期に始まっている。古代英語の時期の一部（ほゞ、2世紀）をも含めて、おそらく、文書記録以前の時代は、当然、これに先行する時代、すなわち、5世紀までを含んでいる。この時代には、すでに、大陸では、色々な条件で、また、ある色々な相互関係によって、間接的に、古代英語を形成しつつあった方言が、発達していた。本来、この時期は、英語の歴史からは、切り離すことができない

(1) текст (2) список (3) долитературная эпоха

い。なぜならば、他のゲルマン諸語と比較しての、英語の構造上の特殊性は、5世紀までの時期に、萌芽していたからである。

そこで、一般には、民族移動は、重要視する必要がない、ということ、認める必要がある。ブリテン島への、アングロ・サクソン族の移動は、一定の時期における、‘新しい言語の分与’⁽¹⁾の意味しているに、止まる。なぜなら、もっと後期において、イギリス人の、アメリカ、オーストラリア、および、その他の地域への、移民の結果として、新しい言語は、形成されなかったのだから。通信機関、ラジオや、映画、その他のものは、こうして発生した方言や、変種に、独立の言語となる、可能性は与えなかった。

§10. 古代英語は、北海に接する、ゲルマニアの北西部、および、ユトランド半島から、紀元後、4世紀から、5世紀に移民した、種々の、ゲルマン種族の方言から形成された。この種族の中でも、重要な種族は、アングル、サクソン、および、ジュート族である。5世紀に記録によれば、449年に、彼等は、ブリテン島の、征服と植民を始めた。このブリテン島は、この世紀の始めまでは(410年)、ローマの植民地であった。が、この島の主な住民は、ケルト族であって、ごく部分的にしか、ローマ化されていなかった。7世紀頃に、ゲルマン民族は、この島の大部分を侵略した。そして、地方のケルト原住民のためには、ただ、(Furth of Froth⁽²⁾ の入江より北部の) 北部スコットランドと、西部の、個々の地域 (Stretkleid⁽³⁾, Wales⁽⁴⁾ および、Cornwall⁽⁵⁾) が、残されているだけだった。そして占領された地域には、いくつかの国家ができた。イギリス本国に、最初に侵入したのは、ジュート族⁽⁶⁾ で、彼等は、ケント州⁽⁷⁾ や、ワイト島⁽⁸⁾ や、ブリテン島にそった、対岸の島に、移動した。西部と北部には、ジュート族にすぐ続いて、ブリテン島に侵入した、サクソン族が、移住した。いくつかの地域に、サクソン族は、Thames 河を越えて移住した。サクソン族の北方では、土地は、アングル族によって、占められた。アングル・サクソン、ジュート族、および、いくつかの他の種族の夥しい方言は、英本国においては、古代英語を構成する、いくつかの、比較的強力な方言に、まとまった。この古代英語は、アングル族 (OE. Enȝle) の名にちなんで、Enȝlisc, すなわち、英語⁽⁹⁾、(本来は、アングル語⁽¹⁰⁾) と、呼ばれるようになった。ここから、英語の現代の呼称、English が由来しているのである。しかしまた、しばしば、古代英語は、アングロ・サクソン語と呼ばれている。なぜならば、古代英語の時期における、英本国の、ゲルマン族の移住民を、アングロ・サクソンの名で呼ぶのが、慣例であったから。この移民の呼称は、学問上でも、しっかりと、認められている。そして、この呼名は古代においても、時々見られる。が、普通は、古代英語の諸史料においては、すべてのアングロ・サクソン族は、あれこれの種族に、最初に従属していたこととは別に、アングル⁽¹¹⁾、すなわち‘アングルの人々’⁽¹²⁾ と呼ばれて— *þa Enȝliscan (menn)*, サクソンの名称は、個々の王国や、地方の名称に、優先して用いられた。そして、現代までの地理的な名称の中に、Essex, Middlesex, Wessex が保存されている。ジュート族の名は、英本国では、非常に早く消滅した。文献によって、古代英語の方言から、4つの方言が、よく知られている。1) ノーサンブリ

(1) выделение нового языка (2) Ферт-оф-Форт (3) Стрэтклайд ? (不詳)

(4) уэлс (5) корнуол (6) юты (7) кенте (8) уайт (9) английский

(10) англий (11) англ (12) английскии люди

ア方言⁽¹⁾。ノーサンプリアの方言、Humber 河から、北方の地域を占めている王国の方言。2) マーシア方言⁽²⁾、Humber 河と、Thames 河の間、マーシア王国の範囲内の方言。3) ウェセックス方言⁽³⁾ (あるいは、西サクソン語⁽⁴⁾ West Saxon) —ウェセックス王国の一部に入っていた、主として、Thames 河の南の地方における方言。4) ケント方言⁽⁵⁾ —ケント州に入る、英国の東南端の島々の方言。ノーサンプリア方言と、マーシア方言は、その起原においては、アングル語であり、多くの一般的な、特性をもっている。ウェセックス語は、英本国のサクソン諸方言の大部分を、統合している。そして又、ケント方言は、ジュート方言⁽⁶⁾ の大部分を統合している。

第 3 章

英語史の各時期の概説

§ 11. 古代英語の時代には、英語は、あまり広くない地域に、広がっていた。英語を話す人々の数は、100 万人を、数えた。この英語は、種族の諸方言の総体であった。この時期には、‘単一の標準語’⁽⁷⁾ は、存在しなかった。

単語の数は、約、一万を数えた。外来語は、比較的少数であり、1000を、上廻らなかった。これに加えて、多数の重要な語が、ラテン語から、英語に、借用された。

古代英語の時期における文法組織⁽⁸⁾ は、十分に発達した、語尾屈折の体系⁽⁹⁾ で、特徴づけられる。古代英語の屈折語屈は、多くの場合において、現代英語よりも、総合的⁽¹⁰⁾ であった。すなわち、いくつかの、文法的範疇の意味を、語尾の形態が兼ねていたのである。例えば、(fisc)-as は、主格であると共に、複数である。

古代英語の音韻組織⁽¹¹⁾ は、まず第一に、強勢のない位置⁽¹²⁾ においては、いくつかの母音⁽¹³⁾ が異っていた、という点で、特徴づけられている。cf. OE. Scipe 船 (単数与格), Scipu (複数主格), Scipa (複数属格)。古代英語とは異なって、近代英語における形態の差異は、母音の対置よりは、むしろ、子音⁽¹⁴⁾ の対置に基いている。cf. ModE. works (wə:ks) —現在時制—と worked (wə:kt) —過去時制。そのみならず、古代英語の音韻組織は、平行的に対応する母音によって、よく特徴づけられている。この時期の各短母音⁽¹⁵⁾ には、同一の音価の ‘長母音’⁽¹⁶⁾ が対応する (cf. OE. ī—i, y—ȳ, e—ē, æ—ǣ, a—ā, o—ō, u—ū, ie—īe, eo—ēo, ea—ēa)。古代英語には、i と u , に集中する二重母音 (集中二重母音 ei, ou, ai, au) と、破擦音 ([ʃ], [tʃ], [ʒ], [dʒ]) は、存在せず、軟口蓋摩擦音 [x] がある。

§ 12. 中世英語の時期には、英語を話す人の数は増加し、話される地域は、拡大された。この時期には、英語は、英本国の境界を越えて、アイルランドを含む、英国の諸島の

(1) нортумбрийский (2) мерсийский (3) уэссекский (4) западносаксонский
(5) кентский (6) ютский (7) единый литературный образец
(8) грамматический строй (9) системы окончаний (система окончания—単数型)
(10) синтетически (11) фонетический состав (12) безударное положение
(13) гласный звук (14) согласный (звук) (15) краткий гласный
(16) долгий гласный

すべての地域まで、広がった。そして、約400万人が、英語で話すようになった。すでに、古代英語の時代に、消滅し始めていた、種族的な諸方言の古代の区分は、新しい区分、すなわち、地域的な区分によって、置きかえられた。又、地方の名称が変わった。古代英語の時期には、地方は、種族の名によって、呼ばれていた。(Ænglcygn⁽¹⁾—アングル族)。中世英語の時期には、地方は、地域の名によって呼ばれた。(Engleland⁽²⁾—アングル人達の土地)。中世英語期以前には、統一した、標準英語はなく、種々の方言が、用いられていた。しかし、国事の面では、フランス語が用いられていた。フランス語は、ある時期においては、貴族的な、上層階級の言語であった。法律や、その他の文書を記録するためには、ラテン語が用いられた。

長い間に、中世英語は、一方では、スカンディナヴィアの方言、また他方では、1066年におけるこの地域の、アングロ・ノルマン征服のときにもたらされた、フランス語の、連続的な、強い影響を受けて発展した。

11世紀から、13世紀の、イギリスにおける、スカンディナヴィア方言は、だんだんに、英語の中に浸透した。これに加えて、英語は、多くの、スカンディナヴィアの語法⁽³⁾を、受け入れた。(特に、北東部方言の北欧語を。なぜならば、英国の北東部に、最も多くの、スカンディナヴィアの住民が、来たからである)。スカンディナヴィア方言と、英語との融合は、ある程度、古代英語の形態的な体系⁽⁴⁾の単純化⁽⁵⁾を促進したことは、疑いない。その単純化は、北東部において、すなわち、特に、最も、大きな、スカンディナヴィアの影響を受けた地方において、急速な、かつ、急激なものであった。

フランス語は、英国においては、根本的には、北東部のフランス諸方言(ピカデリー方言⁽⁶⁾、その他)の要素を混合した、ノルマン方言の形で、主として、広がった。英国の諸地域においては、この混合された方言は、まもなく、大陸のフランス方言から、分離独立した。この方言を、大陸の諸方言から、アングロ・フランス語⁽⁷⁾(Anglo-French)、あるいは、アングロ・ノルマン語⁽⁸⁾(Anglo-Norman)として、区別するのが、慣わしである。英語に対して、アングロ・ノルマン語は、宮廷、封建的な上流社会、行政官庁、学校、および、一般の重要な文語として、(ラテン語と並んで)支配的な位置を占めた。徐々に、ますます多くの単語が、英語のなかに、表われ始めた。大量の、これらの単語には、明らかに、主として、フランス語を使っていた社会階層の、活動と利害、その社会状態と、生活様式が、反映されている。(cf. フランス語から、借入された、court, duke, state, estate, judge, army, faith, art, grammar 等)。フランス語の優越は、14世紀の後半に終るが、フランス語からの借用語が、多くなったのは、ちょうど、この時期にあたる。英語は、フランス語を圧迫しつつ、特に、その語彙を富ませるために、フランス語が与えた、諸要素を、必要とした。すでに、13世紀に、フランス語は、英国において、‘生きている話し言葉’⁽⁹⁾としての性格を、失い始めた。そして、徐々に、規範的な公用語⁽¹⁰⁾

(1) племя англоv (2) земля англичан (3) скандинавизм

(4) морфологический системы (5) “leveling” of the inflectional endings (Robertson, The Development of Modern English. 1954, pp. 44) —水準化—

(6) пикардийский говор (7) англо-французский (8) англо-норманский

(9) живой разговорный язык (10) традиционный официальный язык

に変化したということに、注意する必要がある。このことと関連して、後期の外来語は、すでに、アングロ・フランス語からではなくて、13世紀において、優勢となった、中央フランス語（パリー語、すなわち、フランシャン語⁽¹⁾）から、圧倒的に受け入れられた。中世英語においては、他の言葉からの借用語は、スカンディナヴィア語、および、フランス語からの借用語の数と比較してみると、僅かなものであった。

フランス語の支配は、古代英語（ウェセックス）の文学の伝統の方向を変えた。そして、このことは、中世英語における、方言の細分化を強く、促進することになった。中世英語の諸方言の、全体的な総体は、4つの大きな方言に分れる。1) スコットランド方言—北部の方言、2) 北部方言—Tweed 河と、Humber 河の間、3) 中部方言、あるいは、Midland 方言—Humber と Thames の間、4) 南部方言、Thames より南部。スコットランド、および北部方言は、古代ノーサンブリア方言を継承している。中世英語の時期の始めにあいては、互に、最初は、密接な関係にあった、この二方言は、はっきりと分離した。そのさいに、根本的には、14世紀における、スコットランド方言に、基いて、独自の、スコットランドの標準語の型成が始まった。（Inglis < englic: ノーサンブリアの北部は、英国の北部において、ケルト地方と合同した。そして、その代りに、独立の王国—スコットランドができた）。ミドランド方言は、古代マーシャ方言と、東アングリア（East Anglia⁽²⁾）の諸方言に対応している。南部の方言においては、古代ケント方言が、古代ウェセックス方言にから、はっきりと、分離している。

14世紀の後半に、フランス語が、英語にその地位をゆずったときに、ロンドン方言に基いて、英語の（一般）共通標準語⁽³⁾が、型成され始めた。始めは、サクソン方言に入っていたロンドンでは、14世紀頃に、その言葉が、著しく変った。この方言は、南部（すなわち、サクソンや、ケントの特性に加えて、東部ミドランド（起原的には、アングル語）の特性を獲得して、混合的な性格をもつようになった。かくして、共通標準英語⁽⁴⁾は、根本的には、古代英語の文献に勢力を占めていた、ウェセックス方言ではなくて、東部アングリア方言に近い。この東部アングリア方言は、一部には、マーシャ方言組織の中に入り、また、一方においては、多分、古代英語の時期の文献においては、東部アングリア（Norfolk、および Suffork の伯爵領）の、特殊な方言を型成した。14世紀の、‘ロンドン方言の古典的なタイプ’⁽⁵⁾と、その‘文学における定型化’⁽⁶⁾は、英国の中世における最も偉大な文学者、Chaucer (G. Chaucer⁽⁷⁾, 1340~1400)の言語である。

中世英英語は、古代英語とは異なっている。すなわち、強勢をおかれた母音の長短が、その語中の、その強勢のおかれた位置に、大きく、依存していること：古い時期の‘二重母音’⁽⁸⁾の消滅と、多くの新しい二重母音の発達：種々の強勢のない母音が、大部分は、ふつうは、e をもって表わされる、‘単一の弱化した母音’⁽⁹⁾に平準化したことなどの現象である。（cf. OE. mōna > ME. mōne, OE. talu > ME. tale. まれに、この e の代りに、i, u, が見られる）：また、中世英語は、口蓋音⁽¹⁰⁾のかわりに表われる、

(1) французский (2) Восточный Англия (3) общенациональный литературный образец (4) общенациональный английский литературный образец

(5) классический образец лондонского говора (6) литературный оформление

(7) чосер (8) один редуцированный звук (9) дифтонг (10) палатальный (звук)

スウ音の前舌子音⁽¹⁾によって、特徴づけられる。(OE. *benc* > ME *bench*; OE *ec3*, こゝでは, *c3* は, 二重の口蓋音⁽²⁾ [g'] > edge [éd3(e)] を示す: また, ますます簡単になり, ひどく破壊された屈折体系⁽³⁾, 分析的(構造的)型態の著しい発展⁽⁴⁾: 混質的な‘語イ構造’⁽⁵⁾, その型成には, 英語の語イの, 一番重要な層の一つとなった, たえず増大してゆく, フランス語からの借用語の層が, あずかっている。

§ 13. 中世英語の拡大が止まった, はばその領域に, 最初は, 近代英語も, 止まっていた。しかし, すでに, 16世紀に, アイルランドの組織的な植民が始まった。そして, これは, この国における, 英語の定着をもたらした。また17世紀の最初に, 北米えの英国人の移住があり, そして, これは, 18~19世紀の間続いた。英国は, この両大陸(アメリカ合衆国, および, カナダ)の大部分に拡まった。18世紀と19世紀に, 英語は, また, 英国人による, 植民と共に, 現在, 英語の普及している領域の中に入っている, 他の国々にも入って行った。そして, 英本国自身においても, 英語の普及している領域は, 拡張を続け, 近代英語の時代には, ケルト語を, 侵して, 拡がり続けた。そして, 英語を話す人の数は, この時期においては, 約10倍に, 拡大した。

国語としての英語⁽⁶⁾の型成は, 根本的には, 初期近代英語の時代, およそ, 17世紀の中頃までに完成された。この時代までに, 国語としての英語は, 概して言えば, それ自身の現代の性格を獲得した。そして, 中世英語の長母音の, まさに, その根本的な変化を表わしている, 大母音推移⁽⁷⁾ (the Great Vowel Shift) が起った。最後に, この長母音の多くは, 二重母音になった。(cf. ME. *is* > ModE. *ice* [ais]; -ME. *hē* > ModE. *he* [hi:]; -ME. *tāle* > ModE. *tale* [teil]; -ME. *ōk* > ModE. *oak* [ouk]; ME. *mōne* > ModE. *moon* [mu:n]; -ME. *hū*, *how* [hū] < ModE. *how* [hau]); ‘平準化した強勢のない母音 e’⁽⁸⁾ は, 多くの位置で, 特に語尾では, 消滅した。(cf. 上述の例, *tale*, *moon*; また, 同様に, ME. *loved(e)* ModE. *loved* [lʌvd] 等); 屈折語尾⁽⁹⁾ は, 最少に短縮した。(例えば, もし, 比較級を考えなければ, ‘形容詞⁽¹⁰⁾’ は, 無屈折の語⁽¹¹⁾ (不変化詞) となった)。(‘緊密な語順⁽¹²⁾’ と, 分析的(構成的)型態⁽¹³⁾ が, 文法(構文)組織の重要な要素となった。そして語イは, ラテン語から借用された膨大な量の語で富んでいた, そして文芸復興期における, 科学的な思想の発達, この借用語に反映されている。それと同時に, フランス語からの古い借用語(ラテン語起原の)は, 多くの場合において, この時期の, ラテン語化を受けた (cf. OF., ME. *langage* ModE. *language*, ラテン語 *lingua* の影響をうけて, u が挿入されている)。近代英語の時期を通じて, 種々の国々との交易の発展, 特に17-19世紀における, 大西洋の対岸えの, 英国の移民は, 多かれ, 少なかれ, 世界の極めて多数の言語から, 相当数が, 英語の中に入りこんだ。最近では, 著しく, 英語における‘<国際的な>, 語イの要素’⁽¹⁴⁾ が大きくなった。(主と

(1) шипящий переднеязычный согласный (звук) (2) палатальное двойное

(3) системная флексия (4) значительное развитие аналитических форм

(5) лексический состав (6) национальный английский язык

(7) великий сдвиг гласных (звуков) (8) редуцированный безударный гласный e

(9) флексия (10) имя прилагательное (11) неизменяемое слово

(12) твердый порядок слов (13) аналитические (составные) формы

(14) <интернациональный> лексический элемент

して、科学的一技術的な、そして、幾分か、社会政治的な術語)

近代英語における、音韻変化⁽¹⁾の大多数は、正字法⁽²⁾に、反映されている。その結果、英語には、発音⁽³⁾と、正字法の間に、大きな断絶が生れた。(cf. 上に引用された例。)

第 4 章

古 代 英 語 の 文 献

§ 14. いくつかの‘ルーン文字の碑名’⁽⁴⁾を除いては、すべての古代英語の文献は、若干の変形された、ラテン文字で、書かれていた。

ウェセックス方言は、他の方言よりも、より完全に、文献によって保存されている。それゆえ、古代英語の標準文語⁽⁵⁾として、普通は、特に、この方言を指す⁽⁶⁾。そして、特別な、あらかじめの説明がないならば、古代英語の語形⁽⁷⁾の下に、まず第一にウェセックス方言が理解される。しかし、9世紀以前は、ウェセックス方言の文献は、僅かなものであり、(個別的な法令⁽⁸⁾、位のものであった)。この方言で書かれた、文献の大部分は、9世紀末より表われた、この時代に、アルフレッド大王(治世、871~901)によってなされた、ラテン語からの翻訳が属する。Cura Pastoralis⁽⁹⁾(牧師の勤め)、翻訳は、アルフレッドの序文をつけた、グレゴリー一世の翻訳である。ローマの哲学者ボエスュース⁽¹¹⁾の、De Consolatione philosophiae⁽¹⁰⁾(哲学の慰めについて)の翻訳—および、世界史⁽¹²⁾(Histori-ārum adversus paganos libri septem, すなわち、異教徒にする7つの歴史書)、スベの司祭、オロスュース⁽¹³⁾による翻訳のアルフレッド⁽¹⁴⁾大王が、ラテン語から翻訳した、これらすべての本の中で、世界史は、アルフレッド自身の手になる書き込み⁽¹⁵⁾があるために、特に、価値がある。この書き込みは、翻訳されたものではない、初期ウェセックス方言の立派な文語であって、単に語学的に、興味あるばかりでなく、アルフレッド大王時代についての、非常に興味ある、地理学のおよび民族学的な智識を含んでいる。アルフレッドのこの書き込みは、ヨーロッパの若干の地域の記述と、Ohthere⁽¹⁶⁾と Wulfstan⁽¹⁷⁾の旅行についての物語を表わしている。Halzoland 出身の、金持の、ノルウェイ人である、Ohthere の、第1回の旅行記は、白海⁽¹⁸⁾であった。第2回の旅行は、シュレースヴィヒ⁽¹⁹⁾(Schleswig)であった。Wulfstan は、バルチック海を、シュレースヴィヒから、フリッシュェスハーフ⁽²⁰⁾(Frisches Haff)まで、航海した。古代

(1) фонетическое изменение (2) орфография (3) произношение

(4) руническая надпись (5) образец древнеанглийского языка

(6) C. L. Wrenn, Beowulf (London, 1953), pp. 10: 'The MS of Beowulf shows, in both scribes, the usual Late West-Saxon or (as I prefer to call it) 'classical Anglo-Saxon' form of language of its period.....'

(7) древнеанглийские фазы слов: 普通には、古代英語の語形を言う。文法的な型態を示すのには、《форма》という術語を、смирницкий (著者) は、使っている (原註)。

(8) отдельные грамоты (9) Обязанности пастыря (10) Об утешении философия

(11) Боэций (12) Семь книг историй против язычников (13) Орозий

(14) Альфред (15) вставка (16) Охтхер (17) Вульфстан (18) Белое Море

(19) Шлезвиг (20) Фрише Хаф

英語の時期の重要な文献は、‘アングロ・サクソン年代記’⁽¹⁾である。アングロ・サクソン年代記は、一聯の、平行的に、本の中で、対照されている、事件の書き込みである。この書き込み⁽²⁾は、アングロ・サクソンの僧院の中で、7世紀から、始められた。9世紀の後半に、これらの書き込みは、ウェセックスの、アングル人の首都である、ウィンチェスター⁽³⁾で、統一され、また、補足された。この初期のウィンチェスターの年代記は、その後、ウィンチェスター自身や、他の、アングル人の土地で転写され、(Abingdon, Canterbury, Worcester, Peterborough 等で)そして、より後期の書き込み⁽⁴⁾と、その後にくる事件の、各年の記入のために、増大した。すべての写本の中でも、最も重要な写本は、次の二つである。Parker の写本⁽⁵⁾：この写本の記録は、9世紀の写字生により、ウェセックス方言で、891年にいたるまで、書かれている、それゆえ、この写本は、保存されている写本の中でも、最も初期のものであり、1154年に至るまで、継続された年代記から区別して、Peterborough 年代記⁽⁶⁾と呼ばれている。Peterborough 年代記の後期の書き込み(1122-1154)は、その時代の、北東の中部方言で書かれていて、初期中世英語の時代の言語の、極めて貴重な典型⁽⁷⁾を、表わしている。アルフレッドの翻訳、および、アングロサクソン年代記の、一番古い部分の言語は、後期ウェセックスの言語から、古代ウェセックス、あるいは、初期ウェセックスの言語として異なっている。

後期のウェセックスの文献の中で、最も重要なものは、10世紀の終りから、11世紀の始めまで生きた、僧院長 Aelfric⁽⁸⁾の多数の著述である。アングル語で書かれた、彼の著述の、最もよい写本は、(彼は、また、ラテン語でも書いているが)、その最盛期における、古典的な、‘ウェセックス方言の典型’⁽⁹⁾を与えている。Aelfric の、英語の重要な作品は、彼の、多数の説教や、文典や、英語の語彙集、ならびに、‘聖者列伝’⁽¹⁰⁾と‘旧約聖書’⁽¹¹⁾の翻訳である。Wulfstan の説教集も、また、11世紀初頭に属する。

ノーサンブリアの方言は、若干の文献によって、知られている。この文献の中で、最も価値のあるものは、7世紀と、8世紀に属する、最も古い文献である。(Cadmon の讃歌⁽¹²⁾, Bede⁽¹³⁾の臨終の歌、ルーンの小箱⁽¹⁴⁾、あるいは、フランクの小箱⁽¹⁴⁾と呼ばれているもので書かれている碑銘、等であり、Ruthwell の十字架⁽¹⁵⁾に書かれた、詩の題銘は、この時期に属するかも知れない)。ノーサンブリアの文献の若干は、ルーンの文献を含んでいる(この中で、最も重要なものは、上述の、フランクの小箱と、ルーンの十字架で、書かれたものである)。より後期には、ラテン語からの各行(行間)翻訳⁽¹⁶⁾がある。主として、福音書の写本であった。そして、これは、ノーサンブリア方言の文献の範囲では、最も、注目すべきものである。

マーシャ方言は、宗教的内容をもった、ラテン語のテキストの翻訳と、語彙註集⁽¹⁷⁾によって、示される。マーシャの語彙傍註の、最も重要なものは、8世紀に属する(Epinal Glossary⁽¹⁸⁾、および、その他)ものである。

(1) Англосаксонская летопись (хроника) (2) записка (3) Уинчестер
(4) вставка (5) parker'ская рукопись (6) Peterborough'ская летопись
(7) образец (8) Эльфрик (9) образцы классического уэссекского диалекта
(10) жития святых (11) ветхий завет (12) Гимн Кэдмона (кэдмон)
(13) Беда (14) рунический ларец; ларец фрэнка (15) рутуэльский крест (Ruthwell Cross Inscription) (16) построчный переводы (17) глосс (18) Эпинальская рукопись

ケントの方言は、非常に古い、勅令⁽¹⁾ 一七世紀末から一と、語イ傍註と、より後期の時代の、二つの小さなテキスト(聖歌⁽²⁾ と、讃美歌⁽³⁾)の翻訳によって、知られている。

§ 15. かなり多数の古代英語の韻文の文献は、特別な状況におかれていた。(cf. 上述)ノーサンブリア方言で書かれた、少数の詩を除いては、古代英語の韻文の作品は、比較的後期の写本の中に、保存されている。この後期の写本の言語で、特徴的なことは、ウェセックス方言の特徴と、他の諸方言、多くはアングリア方言の特徴との融合である。この融合の原因は、根本的には、二つの観点から、考えられる。多くの言語学者は、この融合を、次の状況に帰する。すなわち、アングロ・サクソンの詩人は、宮廷から、宮廷へと、移って行かなければならなかったし、この際に、色々な方言に、行き当った。このことは、一方において、彼等は、より理解しやすい言語で、創作することを、よきなくされた。が、にも拘らず、自分の言語を、あまり、通俗的なものにしないようにと、彼等は、自分の方言の要素を、含めておいた。また、他の言語学者は、このような融合を、次の事情に帰している。すなわち、初期の詩人の大多数は、アングルの人であった。(Cadmon は、ノーサンブリアの人であり、Bede も、ノーサンブリア人、Cynewulf⁽⁴⁾ は、アングル人である)。非アングルの特性は、彼等よりも、より後期の、他の写字生による、写本によって、説明される。この場合、証拠として、Cadmon の讃歌が引用されよう。この讃歌は、我々には、二つの写本で、伝えられている。すなわち、特別な特徴のない、ノーサンブリアの方言の写本と、ウェセックス方言の特徴をもつ、ウェセックス方言の写本とで。この混合は、ウェセックスの写字生による、アングル語の原典の転写として、また、アングロサクソンの詩人自身の言語における、種々の方言の特性の混入としても規定されることは、議論の余地がないが、しかし、生きている方言の融合の、現実の可能性についても、十分に、示すことが必要である。

古代英語の時期の、極めて価値ある、韻文の文献の中で、多くの点において、最も重要なものは、英雄詩、ベイオウルフ(あるいは、ベイオウルフの讃歌⁽⁵⁾)である。この作品は、明らかに、7世紀の、丁度始めに、名前の知られていない詩人によって、作られたもので、作品の根底には、神話的な伝説の物語、英雄詩および、スカンディナヴィア起原の、北欧伝説が、横たわっていて、実際に起った、歴史的事件について、物語っている。このような事件の一つは、Hygelac (1202行位)の戦争詩であり、512年から、510年の間の、‘フランク人の歴史’⁽⁶⁾では、Gregory of Tours⁽⁷⁾が、思い出される。概して、ベイオウルフの創作は、異教の時代に属し、5～6世紀における、スカンディナヴィア種族とアングロ・サクソン種族の、性格、風俗や、興味を、反映している。キリスト教が反映されている、幾つかの箇所は、著者自身の筆になるとすることができる。が、また、より後期の詩人の手に成るとも、考えられる。ベイオウルフは、最初は、アングルの方言(マーシアの方言)で書かれた、と考えるのが普通である。しかし、今日まで残っている、唯一の写本は、根本的には、ウェセックスの方言で書かれ、若干のアングル方言の語(形)⁽⁸⁾

(1) charters (грамот) (2) псалом (3) гимн (4) кюневульф

(5) Беовульф (Песнь о Беовульфе) (6) История франков (7) Григорий Турский

(8) английская форма

が、散りばめられているだけである。この写本は、約1000年頃のものとして、二人の写字生によって書かれた。最初の写字生の筆跡は、1939行までで、終っている。詩の一部には、また、他の写字生によって書かれた、ケント方言の型態が、見られる。極めて、本質的に二つの部分の、綴字の仕方は、区別される。保存されている写本の、全テキストは、3182行から、成っていて43節に分れて、散文のように、連続したテキストによって、書かれている。また、詩行の間には、分離の印がない。多くの文字は、多くの場合、そしてまた、行全体にわたって、今では、全く欠けている。写本は、1731年の火事で、特に甚しく、損傷された。この年に、羊皮紙が損われて、炭化した縁が、落ちてしまった。ベイオウルフに、その性格上近いたのは、英雄的、また、部分的には抒情的な内容の、いくつかの小さな、詩的作品である。

キリスト聖徒伝⁽¹⁾と、伝説⁽²⁾の改作が、古代英語の文献の他の群を、構成している。が、また、アングロ・サクソンの歴史の個々の事件に捧げられた詩がある。(ここに、例えば、アングロ・サクソン年代記の詩の部分の書き込みが、属している、この挿入の部分では、英国の地に侵入したスカディナヴィア人に対する戦いが(burnanburch⁽³⁾)の戦闘、および、Maldon⁽⁴⁾の戦闘)記されている。

第 5 章

構 文 論

§ 16. よく知られているように、構文論は、実に、その本質において、語形論⁽⁵⁾よりも。具体性からの、より大きな、抽象を前提とするものである。構文論は、諸型態が、具体的に、実現されたものとは、独立に、型態の機能を研究する。そして、‘文の構成素としての語’⁽⁶⁾はその‘音声の形式’⁽⁷⁾から抽象される。構文論における、言語間の多様性は少ない。が、特に、同一の言語の発達の、種々の相の間では、そうである。特に、構文法においては、それによって、同一の(語)型態⁽⁸⁾が与えられる、語尾変化の多様性は、全く、無差別である。複数の主格及び、対格の古代英語の型態は、次のような格語尾をもっている。-as (daȝas), -a (suna), -an (huntan), -ru (lamburu), そして、-s (days, sons, hunters, lambs) 語尾をもっている、現代英語の複数の型態から、語尾変化の多様性によってではなく、ただ、色々な機能の相違によってのみ、区別される。

言語の構文的な構造を、文の構成の特定の方法(やり方)の体系として、定議できる。文構成の方法は、二つの根本的な群に分れる。1) ‘その物自体としての文の構成方法’⁽⁹⁾, すなわち、文に挿入した構成部分の、実現化の方法 2) ‘語を文に導入するための、語の結合の方法’⁽¹⁰⁾。構文論において重要なことは、文を構成する方法および、種々の‘文型’の研究である。語の結合の方法’は、これに反して、従属的な役割をはたし、語結合の方法は、語群⁽¹¹⁾を作り出す。語群は文に対する、構成素材⁽¹²⁾である。この点に關聯して

(1) христианская легенда (2) предание (3) Брунбург (4) Малдон
(5) морфология (6) слово как член предложения (7) звуковая оболочка
(8) одна и также форма (9) способы создания предложения как такового
(10) способы соединения слов для введения их в предложение (11) слово-сочетания
(12) строительный материал

構文論において、もっとも不変なものは、文構成の方法であり、また、これに対応して、より不変でないものは語型成における、語の結合の方法である。特に、英語の歴史の流れにおいては、語の結合の方法における、十分に、本質的な変化が、起った。その型態の助けによる、語の結合は、多くの場合において、補助的な語。それらの相互的な配列の助けによる語型成に、その地位を、ゆずった。しかし、一般的法則は、根本的には、不変であった。かくして、古代、及び、近代の文は、いずれも、同程度に、動詞性⁽¹⁾ (すなわち、それ自体としての文の型成に際しての、動詞が有する重要な役割)、を特徴として他の法則、主語性 (すなわち、独立の主格がある従属文の型成) もまた、その本質においては、変っていない。人称代名詞の主格は、以前は、主格に所属する格であり、そして、特に、《非主語格 (斜格)》⁽²⁾ から、主格を区別している。この二つの格 — 一般、および、物主の格 — からの主格にあつては、最も ‘独立した、一般的な格’⁽³⁾ が、選り出されているのである。主格におかれた名詞には、決して、前置詞は先行しない。が、述語は、主語と一致する。文の型成における、Intonation⁽⁴⁾ の役割については、ある任意の陳述に対して、十分な資料が、与えられていないとは言え、古代英語における Intonation の役割は、近代英語におけると同様に、重要であったことは、考えうる。かくして、英語の歴史の流れにおいて、‘文の構成の根本原理’⁽⁵⁾ は、根本的には、変らないかった。語結合の方法に表われる、語尾変化は、非常に、重要なものであるとも言え、英語の構造の変化について、また、他の構造をもつ言語についてと同様に、古代英語について、語る根拠を与えない。

述 語⁽⁶⁾

§ 17. Intonation について言えば、古代英語は、唯、その ‘固定した文献’⁽⁷⁾ の文字によってのみ、我々に知られているために、Intonation について、何か決定的なことを述べるのは、むづかしい。が、古代英語における、文の構成の主要な役割は、動詞の直接的な型態の表現である、述語に属している。動詞の直接的な型態、すなわち、述語は、発話を、現実と関係づけ、文に導入された部分を実現し、それによって、文を、かくのごときものとして、型成するのである：cf. 語群⁽⁸⁾ *pāra manna Spræc*, ‘その人達の話し’, 文⁽⁹⁾, *pā men(n) spræcon* ‘その人達は話した’. この二つの区別は、語群における場合と、違って、文においては、発話は、動詞の直接の型態によって、現実存在する事実として、客観的な現実の一定の時と、結びつけられる。

動詞叙述の型態⁽¹⁰⁾ を、特徴づけている範疇は、法⁽¹¹⁾ と、時制⁽¹²⁾ の範疇ある。この範疇は、動詞の直接的な型態の述語において、必然的に、表現され、時制の枠の特性を作っている。数⁽¹³⁾ と法⁽¹⁴⁾ の範疇については、この二つは、それ程、述語動詞の型態に対しては、特性的でない。数の範疇は、間接的な (名詞の) 型態においては、存在してい

(1) глагольность (2) подлежащего (3) независимый—общий падеж

(4) интонация (5) основные принципы построения предложения

(6) сказуемое (The predicate) (7) письменный фиксация (8) словосочетание

(9) ирредложение (10) глагольные предикативные формы (11) наклонение

(12) время (13) число (14) лицо

た。人称の範疇は、直接的な型態においてではあったけれども、一貫して、直接法の単数においてのみ、表現されていた。直接法の複数と、すべての仮定においては、三つの人称の間の差異は、立てられなかった。

古代英語には、次の述語の型があった。

1. 動詞の直接法で表現された単純述語⁽¹⁾

ond hie ða swā **dydon** : **worhton** ða tū 3eweorc on twā healfre ðære ēas.
(そして、彼等はそのようにして、二つの城を、河の両岸に建造した。)

2. いくつかの異なる型をもっている構成的述語。(複合述語)⁽²⁾

a) 動詞的⁽³⁾ (不定詞と分詞。) 述語

Hiora cyning **wæs 3ewundod**
(彼等の王は、負傷した)

Hī hine ne mehton ferian
(彼等は、彼を運ぶことが、できなかった)

b) 本来、名詞的な述語⁽⁴⁾ (実詞と、形容詞)

ðæt Estland is **swyðe mycel**
(その東の土地は、非常に、大きい)

Hē **wæs swyðe spēdi3 mæn**
(彼は、非常に、金持である)

c) 前置詞附名詞的⁽⁵⁾ 述語

ðæt land **wæs on stēorbord**
(その土地は、右舷にあった)

d) 福詞的⁽⁶⁾ 述語

sē mæn is **hēr**
(その男に、ここにいる)

§ 18. 引用された文から分るように、古代の時期の英語には、現代英語におけると、同様に、主要な述語の型⁽⁷⁾があった。しかし、古代英語には、規定された型の間の具体的な事例の配列が、本質的には、違ったものだった。それで、英語の発達のこの時期における、不定詞⁽⁸⁾、あるいは、分詞⁽⁹⁾と、法動詞⁽¹⁰⁾、あるいは、助動詞⁽¹¹⁾の結合は、単純述語とは、無関係である。が、しかし、この結合は、不定詞的、あるいは、分詞的構成述語の間に配分されているか、あるいは、唯、部分的に、単純述語の中に(その構成要素の一つに)入っている。cf. OE. Hē **wæs of-slæ3en**—彼は、殺された, Hē **wæs feohtende**—彼は、戦っていた, Hē **wile sin3an**—彼は歌うことを欲する, Hē **hæfde**

(1) простое сказуемое (2) составное сказуемое (3) глагольное
(4) именное (nominal) (5) предложно-именное (6) наречное
(7) основные типы сказуемого (8) инфинитив (9) причастие
(10) модальный глагол (11) служебный глагол

done man **3e-bundenne**—彼は、その男を縛った。こゝでは、分離された語群は、これに対応する、現代英語の語群とは違って、単純述語を、表わしていない。(He was slain, He was fighting, He will sing, He had bound that man). 最初の三つは、複合動詞的述語⁽¹⁾であるが、4番目の例は、文の二つの異なった部分、すなわち、単純述語(hæfde)と、直接補足語えの規定語(修飾語)⁽²⁾である。換言すれば、古代英語の語群には、類推的に言はれるならば、近代英語を特徴づけている、分析的(構成的)型態は、まだ表われていない。

古代英語において、分析的型態が、実際に、欠けていることを、確認するためには、それによって、この型態が、表われる、次の点を、少し詳しく、研究する必要がある。又、なぜ、この型態は分析的と呼ばれるかを、研究する必要がある。

§170 で論ぜられたことと並んで、より一般的な分析性(綜合性⁽³⁾)の現解のためには、いくつかの、部分的な、より狭く、また、より特殊な理解が、前提となる。この解釈は、十分に確かなものではないとしても、次のような点、すなわち、全く独特の位置を占めるものとしての、一定の特種な構造⁽⁴⁾を分離することに、向けられている。

そのような、より狭い分析性の理解に加えて、一般に言うと、次のような構造が、考えられている。すなわち、一方においては、明らかに、語結合⁽⁵⁾に似た構造をもち、他方においては、本質的に、語群とは異なり、完全な語に似ている。それ自身の中に、語群と、単語の特徴を結合し、あれこれの語の間の、あたかも中間的な位置を占めている、このような、内的に矛盾する構造の本質は、特に、言語学的な意味において、《分析的》⁽⁶⁾などの言葉が、広く使われるようにしたかも知れない。

特に、そのような、特殊な言語学的意味においては、《分析的》という術語は、具体的な言語における、分析的型態を、分離せしめる可能性を示している。

この様な型態の分離は、何に基いているか？

分析的(構造的)な型態のもとに、語の型態すなわち、語型態⁽⁷⁾として、機能的に表われる語群が、了解される。一定の語群が、個々の語型態と近づくと、意味機能的な使用によって、間接的に、それらが、一つの範疇を型成するためには、対応する反映⁽⁸⁾、または、表現⁽⁹⁾、特に、それらの間の接近が、必要である。が、にも拘らず、語群だけは、完全に綜合的な語型態には、変らない。(L. finire habet>Fr. finiraと同様に)それ故に、このような表現は、非常に微妙なものであり、相対的なものである。一般的な唯一の、その方法によって、類似の語群からの、あれこれの遊離⁽¹⁰⁾、また、与えられた構文からの、相対的な分離⁽¹¹⁾が表われる。しかし、そのような分離に、種々の方法がありうる。

a) 最も明瞭なものは、次のような場合における分離と、思われる。すなわち、語型態が与えられた補語的な語⁽¹²⁾をもっている語結合と比較して、一般に用いられていないか、あるいは、それ以外の補助的な語との語結合において、余り、用いられていないか、

(1) составное глагольное сказуемое (2) определение

(3) аналитичность (синтетичность) (4) специфическое образование

(5) сочетание слова (6) анализ, аналитический (7) формы слов, словоформы

(8) отражение (9) выражение (10) обособление (11) изоляция

(12) служебное слово

あるいは、与えられた語結合の領域では、全く知られていない時、英語からの特徴的例としては、近代英語の語型態 *been* であろう。これは、助動詞 *have* とだけ、結合して用いられる。このために、近代英語の、*has been* という形は、特に孤立している。

b) 与えられ補助的語と結合して用いられる際の、語型態の、文法的意味⁽¹⁾ は、その語型態の意味、あるいは、他の場合における、その語型態の意味とは、根本的に、違っている筈である。例えば、近代英語において、第2分詞と呼ばれている型態は、動詞 *have* との結合においては、他の場合においては *have* を特徴づける、文法的な意味をもっていない。それゆえ、現代英語の *has given* においては、他の種々の用法 (*the book is given to him*) などにおいて、それに特有な、受動相 (受身) の意味をもっていない。

c) しばしば、補助的な語のある一定の型態と、本動詞の任意の型態と結合されないこと (非結合性) が観察される。この不結合性は、語結合の、どんな、一般的な法則⁽³⁾ によっても、説明されない。まさに現在みられる語結合は、特に、分離されている。cf. 現代英語の、動詞 *be* と、第一分詞との結合 (*am working* 等)。また、本動詞の第一分詞と、助動詞⁽⁴⁾ の第一分詞との結合の不可能性 (*being working*)。cf. ロシア語で 'буду писать' の、語結合は、可能であるが 'бул писать' の結合は、不可能である。

d) 若干の場合において、主要な語と、補助的な語との結合は、完全であっても、一定の配列の語結合は、その本質的な意味においても、きっぱりと分けられる。cf. 現代英語 *he will do* と *he would do*。

e) 与えられた語群に表われる、主要な語の型態は、時として、その語群においては、他の語群におけるのと同じ、あるいは、ほぼ同一の意味をもっている。が、それにも拘らず、与えられた語群の分離は、その一定の、構文的な、特性によって、主要な語、規定された (修飾された) 単純な型態と特に近い、完全な語群として、生ずる。この際に、語群が、規定された場合においてのみ、分離され、他の場合においては、より一般的な語順が表われることによって、その語群から二種類の語群が、生ずる。例えば、近代英語の受身構文をもった、種々の場合をみよ。"*keep*" の "*k*" は、口蓋化される'、という文においては、語群、'*is palatalized*' は、'*is voiceless, palatal*' などや、'*become palatalized*'、'*remain palatalized*' や、その他の語群からは、それ自身の構造によっては、遊離しない。これに反して、"*k* is frequently palatalized" の文においては、この語結合は、形容詞との結合から、分れ、特に、単純語型 (態) *palatalize* に近づく傾向を持っている。例えば、'*They frequently palatalize "k" and "g"*' におけるように、'*is palatalized*' が、過程を意味して、対象の記号ではない、という意味を暗示して、これを、副詞、*frequently* は、助成する。特に、近代英語における、そのような分離を、行為者を表現している、前置詞 *by* を伴った、補足語 (目的語⁽⁵⁾) が助ける。

これらの前もっての注意の後に、上述の、分離された、古代英語の語群⁽⁶⁾ に、帰ることができる。が、もう一度、次の事を強調せねばならない。普通の語群⁽⁷⁾ と、いわゆる分析的型態の間の差異、すなわち、特に、連続し、並んだ語群によって分けられている諸型

(1) грамматические значения (2) несочетаемость (3) общее правило

(4) вспомогательный (глагол) (5) дополнение (6) выделенное древнеанглийское сочетание (7) обычное словосочетание

態と語群との差異は、非常に微妙なものである。古代英語の語群のタイプ *wæs of-slæzen*, *wæs feohtende*, *wile sinȝan* や, *hæfde...gebundenne* は、比較的大きな部分に、既に、分れていた。従って、まさに、この点において、‘これが、分離する傾向’⁽¹⁾ について、語る事ができよう。しかし、これらの語群は、構造、意味的な、構文上の、あるいは、他の点での分離の境界記号を、明らかにしていない。特に、最も、特徴的な‘境界記号’⁽²⁾ の存在していないことを、注意する必要がある、この境界記号が存在する場合には、与えられた補助的な語との語結合と比較されて、語型態は、他の場合には、知られていないか、あるいは、用いられていないことが分る⁽³⁾。知られているように、*wēsan/bēon* は、古代英語の型態においては、第2分詞を、一般には持っていない。この第2分詞が、存在しないことは、明らかに、次のこと、関係がある。すなわち、この分詞に対応する構文（完了構文⁽⁴⁾）が、まだ、型態として、機能的に表われている、特別な語群には、分離していなかったのである。古代英語においては、補助的な語と結合した語型態の、文法的意味と、他の場合における、この語型態の意味との間に差異はなかった⁽⁵⁾。特に *hæfde...gebunden* の形の、語結合においては、第2分詞（過去分詞）は、近代英語と違って、常に、‘動作を受ける（受動の）意味’⁽⁶⁾ を、もっている。助動詞と分詞の構文の意味的な分離が行われないということは（その不存在は、）古代英語では、分詞の一致に、その直接の表現を見出した。cf. OE. *sum-e wæron of-slæzene* ‘幾人かが殺された。’, *hē hæfde hi-ne ȝe-bunden-ne* ‘彼は、彼を縛った’。その後の英語史において、この構文の意味的な分離によって、分詞の一致は、失われた。古代英語においては、補助的な語の、一定の型態と、主要な語との不結合性は、見られなかったが、一定数の助動詞の諸型態と、本動詞との結合も、特に、分離してはいなかった。のみならず、研究された、上の構文において、助動詞の撰択⁽⁷⁾ は、十分、大きいものであった。このことは、これらの構文の分離度を、相対的に減じたのである。cf. OE. *wæs of-slæzen*, *wearð of-slæzen*, ‘殺された’、こゝでは、*wēsan/bēon*, と、*weorðan* の動詞が、用いられている。本動詞⁽⁸⁾ の分詞、あるいは不定詞の型態と結合している、一聯の動詞の場合においては、極度に、その実質的な意味は、保存された。そして、これら動詞は、実に、助動詞に変る途上にあったのである。cf. OE. *wile sinȝan*, *sceal sinȝan*. 古代英語においては、考察された構造の構文的な分離に対する、十分に、豊富な基礎は、また、存在していなかった。古代英語においては、現代英語に類似した、前置詞 *by* をもった、補足語によって、行為者を、規則正しく表現する構造の欠除が、まず第一に、注意される必要がある。すなわち、古代英語の構文型 *wæs slæzen*, は、この事実によって、*hie of-sloȝen hine*, よりも、*wæs dēad* の構文型に、近いものにされているから⁽⁹⁾。

研究された語群では、古代英語における、分析的（構造的）な型態は、目立っていない、そして、また、この分析的型態は、単純語型態とは、密接ではないと言う点については、テキストの中に、かなり多くの、そのことについての、間接的な表示がある。それゆ

(1) тенденция их обособления (2) признак изоляции (3) cf. paragraph a
 (4) перфектные конструкции (5) cf. paragraph b (6) страдательное (пассивное) значение (7) выбор служебных глаголов (8) основной глагол
 (9) cf. paragraph e

え、動詞の不定詞と, *sculan* と *wilan* 動詞の語結合は, 未来時制の特別な型態を表わしていない, いう点に関しては, 現在ばかりではなく, 未来の動作の表現のためにも, 現在時制の型態が, 広く使われていることを, はっきりと, 示している. cf. OE. *3if mīn fæder mē hāndlaþ and me ʒecnæwð, ic ondræde þæt hē wēne þæt ic hine wylle beswican ānd þæt hē wiriʒe mē.* ‘もし, 私の父が, 私にふれ, そして私を認めるならば, 私が, 彼を欺く積りである, と彼は考え, また, 彼は, 私を呪うと, 思う’. 従って, 過去(完了性)の表現は, 過去時制の単純型態による, ‘語イ的な手段によって’⁽¹⁾, とり扱われている. cf. OE. *Nē mētte hē ær nān ʒebūn lānd,* — ‘彼は, その時まで(それ以前には), 土地の住民の誰にも, 会わなかった’. この場合, 先行した事実, 動詞の型態によってではなくて, *ær* という語によって, 表現された. この点において, 次の文における, 自動詞⁽²⁾ の第2分詞と, *bēon/wēsan* の動詞の語結合の使用は, 注意する価値がある. *Hīe wæron on lānde.* 一見したところ, この語結合は, 完了相の, より後期の型態を思い出させる. (自動詞は *habban* ではなくて, 動詞, *wēsan/bēon* と, よく結合した) が, 名詞 *lānd* の与格の型態は, そのような解釈を, はばむ. この与格の *lānd* は, *into the lānd* ではなくて, *in the land* として, *on lande* を, 理解することを, よぎなくさせる.

一般に, 次のように, 結論することができよう: 古代英語には, 分詞あるいは, 不定詞の型態と, 助動詞, あるいは, 半助動詞⁽³⁾ との, 一定数の語結合があった. しかし, そのような語結合の一つたりとも, その, ひんぱんな使用によって分離されているとはいえず, 単純語型態には, 類似していないし, また, 分析的(構成的)な型態とは, 見なすこともできない. 分析的(構成的)型態に変わりつゝある, まさに多くの類似の語結合においては, 次のことが帰納される.

1. 他動詞の過去分詞と, 助動詞 *wēsan/bēon*, および *weorðan* との語結合>未来受動相

2. 助動詞あるいは, 半助動詞 *habban* と, 他動詞の過去分詞との語結合, および, 他動詞の過去分詞と, 動詞 *wēsan/bēon* の語結合>未来完了相

3) *wilan/sculan* の半助動詞と, 動詞の不定詞との語結合>未来時制の型態

4) 助動詞 *bēon/wēsan* と, 動詞の現在分詞との語結合>継続相⁽⁴⁾

上に挙げられた, 4つの語結合は, それぞれの程度において, 単純語型態に近い.

主 語⁽⁵⁾

§ 19. 古代英語の文における主語は, 常に, 主格によって, 特性化され, 語の次のような働きにおいて, 表われる.

þone nāman ānne we lufodon — ‘この名前だけを, 我々は愛した’ — (*wē*—主格. 主語).

Sē cynin3 hēt lān3 sipu timbran — 王は, 大きな(長い)船を建造することを命じ

(1) лексическими средствами (лексическое средство) (2) неперенодное глагол

(3) полслужебное глагол (4) длительный вид (5) подлежащее

た. - (sē cynin³ 主格-主語)

のみならず、主語に関する指示は、述語の型態の一致においても、見られた。(数と人称の型態において): On fēawum stōwum wīciað Finnas. 一いくらかの場所に、フィン人達は住んでいる(—wīciað—複数 主語 Finnas に対応して、複数. 単数は、wīcað の筈である).

近代英語と比較しての、古代英語の特徴は、文における主語の欠除が、可能なことである。

cf. þā Finnas, him puhte, and þā Bermas spræcon nēah ān ʒebēode—フン人と、ベルム人は、殆ど、一つの言語を話していたと、彼には思われた。(挿入された him puhte には、主語がない)。

従 属 要 素 (註解⁽¹⁾)

§ 20. 主語と述語を除き、古代英語の文は、種々の従属的要素をもっている。すなわち、補足語(目的語)、状況語⁽²⁾(副詞的修飾語)、および、その他。補足語は、前置詞つき、でもあるし、また、前置詞つきでない場合も、ありうる。が、しかし、近代英語とは違って、前置詞なしの補足語⁽³⁾は、次のような観点では、非常に、しばしば、見られた。すなわち、古代英語の語型態の体系⁽⁴⁾は、より、発達したものであった、と言う点である。cf. OE. Hē bād westanwindes. 一彼は、西風を待った。一この場合には、補足語、wettanwindes は、属格⁽⁵⁾によって、作られている。状況語(副詞的修飾語)は、現代英語におけるのと同様、前置詞つきの語群や、副詞で、表現されていた。しかし、現代英語とは異なり、古代英語においては、状況語の機能で表われる、‘語の格型態’⁽⁶⁾が、より大きな役割を果していた。また、一方においては、in, on, ofer, および、その他の前置詞の後では、‘名詞の格型態’⁽⁷⁾は、前置格の語群⁽⁸⁾よりも、より一般的な意味を、より、精密に表現した。(cf. OE, on lānd, ‘into the land, on lande ‘in the land’, この場合には、前置詞は、一般的な見地における関聯だけを表現した。が、しかし、対格、あるいは、与格の格型態⁽⁹⁾は、この関係を、よりの確に表現する。対格は、指定された前置詞をもって、運動を表わす、が、与格は、一定の場所の状態を指し示す。) また、他方においては、(副詞的)状況の表現に対しては、古代英語においては、‘前置詞なしの、名詞の格型態’⁽¹⁰⁾が、広く用いられた。cf. OE, ealne wēʒ, ‘all the way’ (対格・単数)。同様に、OE, þū ilcan ʒēare (与格—造格)

限 定 (詞)⁽¹¹⁾ —修 飾—

§ 21. 古代英語における限定は、もし、それが、形容詞、あるいは、任意の、その形

(1) пояснение (2) обстоятельство (3) беспредложные дополнения
(4) древнеанглийская морфологическая система (5) родительный падеж
(6) надежные формы слов (7) падежная форма существительного
(8) предложное словосочетание (9) падежная форма
(10) надежные формы существительного без предлога (11) определение

容詞的によって表現される場合（形容代名詞，形容詞の数詞，分詞，および，その他）には，被修飾語⁽¹⁾と，性，数，格，が，必ず，一致した．cf. OE. *3ōdum dæge* ‘よい天気’，この場合には，名詞，および形容詞は，どちらも，単数与格の型態をもっているが，形容詞は，また名詞の性をも，示している．古代英語の弁別的な特性は，また，次の点にある．すなわち，形容詞，および，他の形容詞的な語は，被修飾の名詞と，一致する，二つの型態の体系－‘強変化’，および，弱変化’⁽²⁾と，名づけられる体系－を備えている．のみならず，古代英語における，限定は，また，前置詞結合によっても，表現されうる．*mānn mid ānum ēaƷe* ‘片目の男’．しかし，規定の他の表現は，近代英語におけるよりも，著しく，まれである．

語 順⁽³⁾

§ 22. 古代英語における語順は，自由（語順⁽⁴⁾）であった．しかし，自由な語順において，いかなる場合においても，文の構成要素の完全に，任意の配列を，理解すべきではない．例えば，ロシア語におけるように，自由な語順をもった言語にあっては，文の構成要素の，普通の語順の自由は，これらの言語においては，ただ，普通の順位からの，若干の偏差⁽⁵⁾の可能性を与えているだけである．このような意味での，一般に見られる語順を，もっていた古代英語に対しては，次のような語順があった．－‘主語＋述語＋補足語（目的語）＋状況語（副詞句）’⁽⁶⁾この場合，規定語（修飾語）は，規定される語（被修飾語）に先行する．古代英語の‘語の自由性’⁽⁷⁾，すなわち，‘普通の順位からの偏差の可能性’⁽⁸⁾は，語の間の関係の方向の表現に，用いられた．すなわち，思考の流れの表現のために．cf. OE. *būton on fēawum stōwum styccemælum wīciaƷ Finnas*. この場合，主語，*Finnas* が，最後の位置にくるということは，これが，この発話において，新らしく導入された語であるということによって，規定されるのである．

複 合 従 属 文（複 文）⁽⁹⁾

§ 23. 古代英語において，文字に固定されたもので，受けとられる限りでは，複文は，発達していなかった．従属文の構成には，殆ど，特殊な語はなかった．従属接続詞としては，指示副詞⁽¹⁰⁾が，用いられた．この副詞は，従属文においては，関係詞的な意味で用いられ，そして，しばしば，主文の始めに，指示的な意味で，繰返された．cf. OE. *þā hē þās āndsware onfēnƷ, þā onƷon hē sōna sinƷan*－彼が，その返事を受けとった時，その時，彼は，すぐに，歌い始めた．一かくして，接続詞としての，指示代名詞の使用は，従属文と，主文を，分化したばかりでなく，その代名詞自身が，指示的な意味における指示詞の用法から，離されることになる筈である．従属文の未発達というこの点に

(1) определяемое слово (2) сильное (слабое) склонение (3) порядок слов
 (4) свободный порядок слов (5) некоторое отступление
 (6) подлежащее＋сказуемое＋дополнения＋обстоятельства (7) свобода слов
 (8) некоторого отступления от обычной последовательности
 (9) сложно-подчиненное предложение (10) указательные наречия

においては、デンマンクの言語学者、Otto Jespersen⁽¹⁾ のように、言語の使用者の、思考の未発達の結果を、認めることはできない。問題は、思考の未発達ではなくて、英語が、口頭的な型態だけを、もっていた時には、従属文は、あまり必要ではなかった。あれこれの語の意味は、表情や、直接に、その場にあり、了解されているもの、によって表われていた。主要なものを、従属的なものから、区別するためには、Intonation や、Gesture⁽²⁾ その他のものによった。言語の存在の条件が変わった時、すなわち、言語が、文字で固定化された後では、意味における、主要なものと、主要でないものを区別するためには、‘文の構造的な特性’⁽³⁾ が用いられた。

従属文の発達は、外型的には、文における、語順の使用に、反映された。従属接続詞の機能において使われた指示副詞と、接続詞の使用に当っては、従属文は、外見上、主文とは、全然、区別が、つかなかった。主文の場合には、同一の指示副詞が見られうる。しかし、すでに、相関的な意味では、従属文と、主文の識別に対しては、一つの法則が作られていた、そして、この法則によって、述語は、従属文においては、後の位置に移ったが、主文においては、主語に先行する。(cf. 上述の、引用文.)

— Finis —

(高知女子大学 英語学研究室)

(1) Отто Есперсен (2) жест (3) структурная особенность предложения